

「内在的属性」表現に関する日中対照研究

周 国龍

要旨

本稿は名詞述語文と形容詞述語文に関する「内在的属性」表現における日中両言語の対照研究である。

日本語は「内在的属性」表現と「非内在的属性」表現に分類されている。テンスの関与のない「内在的属性」表現は、テンスの関与により、「非内在的属性」表現に変わる。「非内在的属性」表現はテンスを優先させて表す必要がある。中国語は日本語のような文法範疇としてのテンスが無いいため、「内在的属性」表現と「非内在的属性」表現との区別はない。

テンスの表現形式の有無で、当然、「内在的属性」表現に及ぼす影響はある。その影響はどのような形で現れるのか、明らかにする必要はあると思われる。

本稿は日中両言語の表現形式におけるテンスの有無という違いを手掛かりに、その背後にある両言語の考えの違いを考察した。

キーワード：

内在的属性，非内在的属性，テンス，事象叙述

1. はじめに

本稿は名詞述語文、形容詞（形容動詞も含む）述語文に関する「内在的属性」表現において、中国語と日本語との異同点について考察する。

日本語の「内在的属性」表現はテンスの関与によって、「非内在的属性」表現に変わるが、中国語は「内在的属性」にテンスの関与が及ばないため、「非内在的属性」表現に変わることはない。その代わりに事象発生時を表すために、「事象叙述」表現を持ってそれを補って表す。

本稿に関わる「内在的属性」表現と「非内在的属性」表現は主に次の三要素からなる。

- 1) 話者
- 2) 話者の発話時と発話時に見た事象発生時との時間的關係
- 3) 話者の見た事象の属性

この三要素は日本語も中国語も同じである。それならば、表現形式も近似でもよさそうであろうが、実際は大きな違いが見られる。表現形式の背後に話者の考え方による表現の仕方があると思われる。言い換えれば、話者の考え方の違いが表現の仕方を通して表現の

形式に現れる。

三要素において、1 の話者が 2 に焦点を当てて表現するか、それとも 3 に焦点を当てて表現するかによって、表現の仕方が変わる。日本語は 2 の時間的關係を優先させるのに対し、中国語は 3 を重要な要素としている。日中両言語の名詞述語文、形容詞述語文における表現形式に違いがある。その違いはそれぞれの表現方法の違いにより、それぞれの考えの違いが反映されている。

日本語にはテンス・アスペクト¹⁾ という文法範疇があり、話者が表現するときに、発話時点と事象発生時点との時間的關係を考慮する必要がある。一方、「中国語は日本語や韓国語のような文法範疇としてのテンスを持たない言語である」²⁾。このような違いがあることから表現形式上自ずと日本語は中国語と異なってくる。

日本語では、時間的な制約を受けることなく、恒常的な属性を表す「内在的属性」表現と、テンスの関与があることで、「非内在的属性」表現に分類される。中国語では「内在的属性」表現は認められるが、日本語のようなテンスの関与による「非内在的属性」のような表現形式はない。中国語で欠如した日本語の「非内在的属性」表現形式を時間を表す言葉と動詞等を用いた「事象叙述」といった表現形式で補う必要が生じる。名詞述語文と形容詞述語文において、日中両言語のこのような違いは表現形式の違いとして如実に現れる。周（2019）ではこの表現形式の違いによる事象の表し方にずれがあることを指摘したが、何故このような違いが生じたのかについては深入りすることはできなかった。本稿はこのような両言語の表現形式の違いを考察し、この表現形式の違いから両言語の表現方法、引いては両言語の話者の考え方の違いを明らかにしたい。

2. 問題提起

名詞述語文と形容詞述語文において、テンスの関与がない恒常的な「内在的属性」表現では日本語も中国語もほぼ同様の表現形式で対応することは可能である。

- | | |
|-----------|--------|
| 1. 雪は白い。 | 雪是白的。 |
| 2. 地球は丸い。 | 地球是圆的。 |

しかし、日本語はテンスの文法範疇も備わっているため、話者は発話時点と事象の発生時点との関係を見計らって表現することが必要であり、また、テンスの関与が可能で、その関与により、「内在的属性」表現は「非内在的属性」表現に変わるという現象も見られる。

- | | |
|-----------------|--|
| 3. 私は学生だ。 | |
| 4. 今、私は学生だ。 | |
| ? 5. 今、私は学生だった。 | |
| 6. 私は学生だった。 | |
| ? 7. 去年、私は学生だ。 | |
| 8. 去年、私は学生だった。 | |

9. 刺身は美味しい。

? 10. 昨日の刺身は美味しい。

11. 昨日の刺身は美味しかった。

例3のような表現は「内在的屬性」表現として使われることもできるが、テンスの関与、例えば「今」といった現在を表すテンスが秘められていると認められれば、別に時間を表す言葉がなくても「非内在的屬性」表現として使われることもあるわけであるが、時間の言葉があればその制限を受ける。例5、例7のように過去の時間を表す言葉がある場合、必ずその時間の言葉に合わせなければ非文になることを見ればわかるであろう。

中国語にはテンスによる表現形式の欠如のため、日本語のテンスにあたる表現形式はなく、同じような表現形式で表すことはできないため、はっきりした「非内在的屬性」表現形式がなく、「非内在的屬性」の表現で表すことはできない。それを「事象叙述」表現などに変えて対応しなければならない。両言語の表現形式の間にずれが生じるわけである。

上記日本語の例で言えば、例3「私は学生だ」は「我是学生」で対応できる。テンスの関与があったとしても、表現形式においてずれは認められない。しかし、「私は学生だった」のように、明らかにテンスの関与がある場合、中国語にはテンスの形式がないため、「我是学生了」にはできない。例8のように、「去年我是学生」の「去年」といった過去の時間を表す言葉で補う。また、「刺身は美味しい」は刺身の「内在的屬性」として表現しているのなら、中国語も「生鱼片很好吃」で同じような意味を表現できる。「刺身は美味しかった。」になれば、中国語は同じ表現形式の「? 生鱼片很好吃了」で対応することはできない。「昨日の刺身は美味しかった」のように、「昨日」といった過去の時間を表す言葉があるなら、「昨天的生鱼片很好吃」で表現することは可能である。

過去を表す時間の言葉があれば事足りる中国語の場合と過去の時間を表す言葉があれば必ずそれ相応の文法形式を必要とする日本語とでは、ただ表現形式の違いだけなのか、もし、表現形式の違いにとどまらなければ、その背後にどのような違いが隠されているのか、何故このような違いがあるのかを究明する必要があるだろう。

言語の表現形式、表し方はその言語話者のモノの見方、考え方と密接に関係していると考えられる。このような日中両言語の表現形式の相違は両言語話者の「内在的屬性」表現をどのように見るのかという考え方の違いにあると思われる。両言語の間でどのような異同点があるか、以下、検証してみる。

3. 日本語について

日本語ではテンスの関与を受けない事象の恒常的な属性を表す「内在的屬性」表現がある。例えば以下のような表現である。

1. 雪は白い。

2. 地球は丸い。

このような恒常的な属性を表す「内在的属性」表現は少なく、むしろテンスの関与によって「非内在的属性」表現に変わる方が多い。話者が発話時点と事象の発生時点との時間的關係を考慮に入れ、テンスの関与により、「非内在的属性」表現として表す。恒常的な「内在的属性」表現はテンスの関与はないため、事象を優先させて表現すべきか、話者は発話時点より見た事象発生時点との関係からテンスを優先させて表すべきかといった考慮をする必要はない。従って、自ずと事象の属性だけが表されることになる。しかし、「非内在的属性」表現はテンスの関与があるため、話者は事象の属性よりも発話時点より見た事象の発生時点を考慮に入れて、テンスへの配慮を優先させて表さなければならない。

以下、例をあげて説明する。

本来、人間の性別は変わる可能性もないので、テンスに関与される余地はほとんどなく、所謂「内在的属性」表現のはずである。

12. (甲と乙が10年ぶりに会った) ³⁾

甲：お子さんは何人？

乙：このあいだ小学校に入ったのが一人いるよ。

甲：a. あ、そう。男の子？女の子？

b. ??あ、そう。男の子だった？ 女の子だった？

(-??見たら男の子だった？女の子だった？)

この場合、子供の恒常的な属性だけ言えば済む話なので、テンスの関与はありえない。従って、「だった」といったテンスを表す表現形式は使われない。しかし、人間の性別という事象の「内在的属性」についてではなく、話者が見た生まれた瞬間の観察の結果を伝える場合、話者がテンスを優先させて表すことも可能である。それにより、恒常的な属性のはずの性別も「だった」というテンスの表現形式が用いられ、「非内在的属性」表現に変わるわけである。

13. (甲の子供が無事生まれた。甲、病院から母親に電話をかける。) ⁴⁾

甲：今生まれたよ。

母：そう。それはよかった。

a. で、どっち？男の子？女の子？

b. で、どっちだった？男の子だった？女の子だった？.

甲：a. 男の子だよ。

b. 男の子だったよ。

聞く母も答える甲も子供の属性に関するやり取りなら、aのように「内在的属性」表現になるであろう。しかし、話者は「性別が判明した瞬間に観察された目撃情報として述べることができる」⁴⁾。つまり、bのように、話者の報告する時点と既に過去となった観察した時点の結果との時間のずれを考慮に入れた表現となっている。このように、「内在的属性」表現もテンスの関与ができるならば、事象の属性よりもテンスの関与を優先させるこ

とにより、「内在的属性」表現も「非内在的属性」表現にしてしまうことも可能である。

日本語において、例(12)のように恒常的な「内在的属性」表現においてはテンスの関与は不可能に近いが、少しでも何らかの条件によりテンスの関与ができれば、「非内在的属性」表現になる可能性は秘められているわけである。次はテンスの関与がより可能になるような例である。

3. 私は学生だ。

6. 私は学生だった。

人間にとって、「学生」はある期間の一時的に「内在的属性」として有するようなもので、時間が立てば変わるものである。つまり、「～だ」といった時に、「学生」という「内在的属性」を有する。「だった」は発話時点からさかのぼって、過去のある時期に「学生」という「内在的属性」はあったが、発話時点においてはもはや失われたと理解されるであろう。このような恒常的な〔内在的属性〕ではない例の場合、テンスの関与の可能性は秘められている。

4. 今、私は学生だ。

? 5. 今、私は学生だった。

? 7. 去年、私は学生だ。

8. 去年、私は学生だった。

例3の場合、テンスの関与はそれほど意識されないかもしれないが、例5のように、時間を表す言葉、「今」などが入ることにより、過去のテンスを表す「だった」は使えないし、逆に例7のように「去年」といった過去のテンスを要求する言葉が入ると、「だった」を用いなければならない。このように、時間を表す言葉が入ることで、テンスが意識されなければならない。その結果、テンスを表す表現形式を顕在化させなければならないのである。

14. 忘れてた 主人の命日 今日だった。⁵⁾

例14は、普通に言うならば、「今日は主人の命日だ」であろう。その日は「主人の命日」という「内在的属性」を有する表現となる。しかし、「忘れてた」に呼応して、「だった」を用いて、テンスを顕在化させる必要が生じた。テンスの関与の結果、「内在的属性」表現も「非内在的属性」表現として表さなければならない。

以上の例を見てわかるように、恒常的な「内在的属性」を有しない事象の場合、テンスの関与ははっきりした形式は見られなくても、実はテンスの関与の可能性が秘められているのである。話者が発話時点と事象の発生時点との関係を考慮に入れれば、事象の属性よりもテンスを優先させて表現形式に反映させなければならない。言い換えれば、恒常的な「内在的属性」を有しない事象はテンスの関与はいつでも可能であり、しかもテンスの関与があれば、事象の属性よりもテンスの関与を優先させなければならないし、「非内在属性」に変わるのである。

15. あなた、ばかですね。

16. あなた、ばかでしたね。

周(2019)で指摘したように、「ばかです」はその人間の「内在的屬性」を言い表しているから、人間そのものを否定的に評価する表現である。当然意味的にもきつく感じられるわけである。話者が発話前に見聞きしたある事象について言い表すならば、話者の発話時より先に起きた事象なので、「でした」で表すことになる。勿論、「ばかだ」という「内在的屬性」そのものを言うよりも、テンスの関与により、ある単独の事象について言及する表現になる。このような「非内在的屬性」表現で言われた方もまだ気持ち的には多少楽であろう。

このように、テンスの関与が顕在化されなければ、「内在的屬性」を表すことも可能であろうが、テンスの関与が顕在化されれば、「非内在的屬性」表現となり、一時的、個別的な事象の属性を表すことになる。以下のような例も同じである。

17. 甲：ここのキムチはおいしいですよ。食べてみてください。⁶⁾

乙：そうですか。じゃ、ちょっと。(一口食べて、からそうな表情をする)

甲：(乙がからそうな表情をした直後に)

辛いですか？/辛かったですか？

？18. 今、辛いですか？

例17では「辛いですか？」、「辛かったですか？」は両方とも成立するが、意味に違いがある。辛いかどうかは言ってみればテンスと関係なく、キムチの「内在的屬性」つまりキムチそのものが辛いかどうかという属性を聞く表現である。一方、「辛かったですか」はテンスの関与により、食べた直後の個人の感想を聞くことになる。この場面においてテンスと関係なく、「内在的屬性」を聞くことも可能であろうし、テンスの関与のある場面としての「非内在的屬性」を聞くことも可能であろう。

例18のように、「今、辛いですか」は「今」という時間を表す言葉の介入により、テンスが顕在化されなければならない。テンスの関与があるため、「非内在的屬性」表現になる。つまり、「内在的屬性」を表すことができない。この場面において発話時点より先に起きた「食べた」感想を聞いているので、過去形でなければ非文になるわけである。

例17を見てきたように、「辛い」は内在的屬性を表すが、「辛かった」はテンスの関与があり、口に入れた直後のキムチについてはあるが、その時の感想を尋ねたわけである。

19. ○○映画は面白いですか。

20. ○○映画は面白かったですか。

場面設定がなくても、例19は通常その映画の属性について尋ねているが、「面白かった」はその映画を見たことを前提に、相手に映画を見た感想を尋ねている。つまり、テンスの関与により、映画そのものの「内在的屬性」を聞くのではなく、個人の見た感想を聞いたわけである。

日本語において、事象の「内在的屬性」を表すよりもテンスの表現形式を表すことが優

先される。テンスの影響を受け、「内在的屬性」表現は「非内在的屬性」表現として用いられるようになる。

以上、主に日本語の「非内在的屬性」表現に関する考察をしてきた。それを次のようにまとめることができよう。

1. 恒常的な「内在的屬性」表現はテンスの関与の余地はない。従って、話者はテンスへの配慮をする必要はなく、事象の属性を表す表現形式だけでよい。
2. 「内在的屬性」を有する事象であっても、テンスの関与の余地があれば、テンスの関与により、「非内在的屬性」事象に変わりうる。このような変わり得る表現で、現在形の表現形式に時間を表す言葉がなくても、テンスの関与の可能性は秘められている。当然ながら、テンスの関与が認められなければ、「内在的屬性」表現として理解することもできる。
3. テンスの関与が表現に顕在化されれば、「非内在的屬性」表現になる。この場合、話者が発話時において、テンスを優先させて表現する必要がある。
4. テンスの関与がある「非内在的屬性」表現は、事象の一時的、或いは個別事象の属性を表す表現になるか、あるいは話者の事象に対する感想、認識等を表す表現になる。

4. 中国語について

中国語は、日本語のように文法範疇としてのテンスがないため、テンスの関与によって、「非内在的屬性」表現に変わることはなく、「内在的屬性」表現だけが認められる。この点から見れば、当然、中国語と日本語との表現形式に違いが現れるはずである。

以下、主に前出の日本語の例を中国語でどのように表すかを分析し、名詞述語文と形容詞述語文における中国語の「内在的屬性」表現を考察してみる。

恒常的な属性を表す場合、中国も日本語とほぼ似た表現形式で表現できる。

- | | |
|-----------|--------|
| 1. 雪は白い。 | 雪是白的。 |
| 2. 地球は丸い。 | 地球是圆的。 |

このような恒常的な属性を表す表現は時間を表す言葉も入る余地はなく、恒常的な属性を表すだけである。時間を表す言葉があってもテンスといった表現形式は現れない。従って、「非内在的屬性」表現にならずに、常に「内在的屬性」表現である。

21. 我是学生。

これだけでは「内在的屬性」表現として使われ、学生という属性を有している。しかし、時間を表す言葉が入れば、

22. 我现在是学生。

「現在」という時間を表す言葉はあるため、「現在」という時点における「内在的屬性」についての表現になる。

23. 我以前是大学生。

発話時より前にあった属性を表すためには、「以前」といった事象発生時を表す言葉が必要になる。この場合、「以前」という時点においては「学生」という属性を有することを表している。これは話者が発話時から見て過去の事象だから「以前」が用いられたのではなく、事象自体が過去の時点でその属性を有していることを表す必要があるからである。つまり、中国語では事象の属性は話者の発話時点によって左右されないが、その代わりに時間を表す言葉で事象自体のそれぞれの時点における属性を表すのである。だから、「以前」という時間を表す言葉があっても、「現在」という時間を表す言葉があっても「是学生」という事象の属性を表す表現形式は変わることなく同じなのである。

中国語は文法範疇としてのテンスはないから、話者はテンスを考慮して表現する必要はないし、表現のしようもない。

24. 我忘了，今天是丈夫的忌日。(忘れてた 主人の命日 今日だった。)

「今日」は主人の「命日」であるという属性は変わらないので、日本語のように「だった」に当たる表現はないが、その「だった」のニュアンスを表すならば、「我忘了」と発話時より先に発生したことを「事象叙述」の表現形式で表現するのみである。また、亡くなった人の年齢を言う時もそうである。

25. a. 享年 90 岁。

をくだけで言えば、

b. 他去世的时候是 90 岁。

c. (他去世了，去世的时候是 90 岁。)

やはり「死的时候」(死んだ時)の年齢の属性を言う。例 24 と同じように、その時における属性を言うだけであって、今から見て亡くなったのは過去になったからではない。過去のことを表そうとするなら、c のように、「彼はこの世を去った」と「事象叙述」表現で表すのが普通であろう。これらの例から見てもわかるように、事象の属性については、中国語はテンスと関係なく表現する。話者の発話時点における事象発生時が過去で、それを表現しようとするならば、「事象叙述」表現を用いて表す。

26. 辣吗? (例 17. 辛いですか?)

27. 你觉得辣吗? (例 17. 辛かったですか?)

このような場面で、26 はテンスと関係なく、その「内在的属性」を聞くなら、「辣吗?」(辛いですか) になるだろうが、食べてから時間が経った場合でも「辣吗?」である。つまり、キムチの「辛いかどうか」という属性を聞くなら、「辣吗?」で聞くのが普通である。もし、食べた直後で、食べた感想を聞くなら、例 27 の「你觉得辣吗?」のように聞くことになる。これはキムチの属性「辣不辣」を聞くのではなく、食べた感想を聞いているのである。言ってみれば、「事象叙述」表現である。

28. 这里的辣白菜很好吃。(例 19. このキムチはおいしかったですよ。)

中国語はこのように場所の言葉があって、言外の意味で食べたことを暗示したとしても、「这里的」は「辣白菜」の修飾語で、「这里的」により、「辣白菜」の範囲は限定的になるが、「辣白菜」の属性を表していることには変わらない。

過去の時間を表す表現が入った場合も同じような解釈が可能である。

29. (昨日、甲が映画を見に行った。今日、質問に答えて)

甲：昨天的电影很好看。(昨日の映画は面白かったです。)

「昨日の映画」の属性は「很好看」であることを表していると同時に過去の時間を暗示している。もし、過去の動作を言葉で表す必要があるならば、「昨天去看电影了」といった「事象叙述」表現で「見に行った」動作を表し、そして「映画」の属性「很好看」を表す。

30. 昨天去看电影了，(电影)很好看。(昨日、映画を見に行った、面白かったです。)

これらの例を見てわかるように、時間を表に出して表そうとするならば、「事象叙述」で行った動作の時間を表し、そしてその事象の属性を表す。このような表現方法により、中国語は事象の「内在的属性」を常に表現できるわけである。

12. (甲と乙が10年ぶりに会った)

甲：お子さんは何人？

乙：このあいだ小学校に入ったのが一人いるよ。

甲：a. あ、そう。男の子？女の子？

31. 是吗。是女孩，还是男孩？

12の例では、話者がその場で子供を見た時の判断を聞くのではなく、子供の「内在的属性」を聞くだけだから、テンスの関与をする余地はないわけである。従って、中国語も31のように属性を表せばよいわけである。しかし、次の例では、日本語と中国語は異なる。

13. (甲の子供が無事生まれた。甲、病院から母親に電話をかける。)

甲：今生まれたよ。

母：そう。それはよかった。

a.で、どっち？男の子？女の子？

b.で、どっちだった？男の子だった？女の子だった？

甲：a.男の子だよ。

b.男の子だったよ。

32. a.是男孩。

33. b.我看了，是男孩。

もし、aのように、その属性を言い伝えるなら、中国語も同じくその属性を表す表現でいい伝えることができるが、bのように、観察した結果を表すならば、中国語は日本語と違って、「我看了」と「事象叙述」表現の過去形で動作を表現しておいて、そして、日本語のようなテンスと関係なく、「是男孩」でその属性を表すことになる。

以上、見てきたように、中国語は名詞述語文と形容詞述語文を表す時に、テンスの関与

がないため、日本語のように、テンスを優先させることなく、事象をいつも「内在的属性」表現として表すことが可能である。動作の発生時点を表すなら、「内在的属性」表現とは別に、「事象叙述」の方法で動作の発生時点を表す表現を付け加えればよい。即ち、中国語では、日本語の「非内在的属性」表現を、「内在的属性」表現に「事象叙述」表現を加えて表す方法が用いられるわけである。

以上、中国語の「内在的属性」表現における中国語の表現について考察してきた。それを次のようにまとめることができよう。

1. 事象の属性と話者の発話時点と事象発生時との関係を見て、テンスを優先的に表すことはない。だから、常に「内在的属性」表現で表す。
2. 話者の発話時点と事象発生時との関係を、明らかにするには「事象叙述」表現で補って表すことができる。
3. 時間に関わる表現は「事象叙述」表現を用いることで、「内在的属性」表現と分けて表現することができるようになる。この方法により、事象の「内在的属性」を常に表現できることが確保される。

5. おわりに

以上、名詞述語文、形容詞述語文の表現において、「内在的属性」表現を「非内在的属性」表現に変える場合、日本語と中国語はどのように表現するか、について見てきた。

日本語から見れば、名詞述語文、形容詞述語文の表現において、「内在的属性」表現と「非内在的属性」表現に分類することができる。恒常的な「内在的属性」表現ではテンスの関与がない。日本語には文法範疇としてのテンスがある。そのため、「内在的属性」表現はテンスの関与があれば、テンスを優先的に考慮して表現形式に反映しなければならないため、「非内在的属性」表現になる。「非内在的属性」表現には時間を表すことがなくても、テンスが秘められる可能性があるが、時間を表す言葉があれば、時間を表す言葉に合わせてテンスの表現形式を適切に選択して表さなければならない。このような「非内在的属性」表現は事象のその時その時の属性、話者の個別的な感想、あるいはその認識を表す。

中国語には文法範疇としてのテンスがないため、当然、話者の発話時点における発話時点と事象発生時点との時間のずれを考慮に入れてテンスで表す方法はなく、それを表す表現形式もないわけである。その代わりに、中国語は時間などの言葉を加え、「事象叙述」表現を用いて事象自身の発生時点を表す表現方法はある。このような表現方法があるから、日本語のような「非内在的属性」を表す表現方法がない代わりに、「事象叙述」表現でそれを補うことが可能になるわけである。また、「事象叙述」表現と「内在的属性」表現を分けて表すことによって、常に事象の「内在的属性」を表現することができる。

以上、名詞述語文と形容詞述語文において、日本語の「内在的属性」表現を中国語はどのような表現形式で対応するかについて、その異同点を考察してみた。日本語の「内在的

属性」表現をテンスの関与により、「非内在的属性」表現に変わるが、中国語はテンスの関与がないため、「非内在的属性」表現を「事象叙述」表現+「内在的属性」表現で対応しているわけである。このような表現形式の背後に次のような考えの違いが見えてきた。即ち、日本語は話者の発話時と事象発生時の時間的な関係を考慮して、「内在的属性」が「非内在的属性」に変わっても、テンスの表現形式を重要視するのである。一方、中国語話者はどのような場合においても、事象の「内在的属性」を常に保持することが大事だと考えているようである。

- 1) 本稿ではテンス・アスペクトを特に区別しない。以下、便宜上テンスという。
- 2) 生越 (2002) p. 146
- 3) 井上・生越 (1997) p. 49
- 4) 井上・生越 (1997) p. 42
- 5) 河出書房新社編集部 (2018) p. 83
- 6) 井上・生越 (1997) p. 41

参考文献

- 井上優・生越直樹 (1997) 「過去形の使用に関わる語用論的要因」 『日本語科学』第1号
国立国語研究所編
- 生越直樹 編 (2002) 『対照言語学』東京大学出版会
- 河出書房新社編集部 編 (2018) 『百歳万歳編 シルバー川柳』河出書房新社
- 周国龍 (2019) 「属性叙述」表現に関する日中対照——「～ダ」と「～ダッタ」を巡って」
『鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要』第2号 人文科学・社会科学編
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版

国際地域学部国際地域学科 zhou@m.suzuka-iu.ac.jp

A Contrastive Study of Inherent Property in Chinese and Japanese

Guo Long ZHOU

Abstract

This paper is a contrasting study of Japanese and Chinese languages in terms of "inherent attributes" for noun predicate sentences and adjectival predicate sentences.

Japanese is classified into "inherent attributes" and "non-inherent attributes" expressions. The "inherent attribute" expression, without the participation of the tense is changed into the "non-inherent attribute" expression by the participation of the tense. The "non-inherent attribute" expression needs to be expressed with priority on tense. Chinese does not have tense as a grammatical category like Japanese, so there is no distinction between "inherent attribute" expression and "non-inherent attribute" expression.

The presence / absence of the tense expression format naturally has an effect on the "inherent attribute" expression. It seems necessary to clarify how the effect appears.

In this paper, we examined the difference in the thinking between the two languages behind the difference in the expression format of both languages.

Keywords : Inherent Property, Non-Inherent Property, Tense, Event Description